

# 江戸語における「ないければ」

——洒落本における打消の助動詞を用いた条件表現——

奥村 彰 悟

キーワード：洒落本、「ないければ」、条件表現、当為表現

## 要 旨

江戸語における打消の助動詞は、洒落本の調査によると、明和期では「ぬ」「ず」のほうが「ない」よりも優勢であったが、寛政・享和期では「ない」のほうが優勢となる。しかし、打消の助動詞を用いた条件表現では、明和期から寛政・享和期にかけて、「ねば」「ずは」のほうが「ないければ」よりも多く用いられている。

十八世紀後半の江戸語では、当為表現の場合には、「ねば」「ずは」「ないければ」のいずれも用いられたが、条件表現の場合には、「ねば」は恒常条件として用いられ、「ずは」は仮定条件として用いられ、「ないければ」は仮定条件、恒常条件として用いられた。十八世紀後半の江戸語における「ないければ」は「ねば」「ずは」の両方の用法を持っていたのである。

## 一 はじめに

江戸語では打消の助動詞「ない」「ぬ」「ず」の後に接続助詞「は」「ず」の場合には「は」が続く場合<sup>注1</sup>、それぞれ次のような形で見られる。

- 1 「ホンニサ人の異見はいゑますが我身の異見は出来ねへとやらで其身になつて見ないければわからないのサ」『夜色のたまり』
- 2 「ちよつと浮里さんの所へいかねばならぬ」『錦之裏』
- 3 「アイ左様なら、もしけふ中にうれずは、あしたもつて参りましやう」『錦之裏』

このうち例文1のような、江戸語の「ないければ」<sup>注2</sup>が現代日本語では「なければ」として使用される。

本稿では、江戸語における打消の助動詞が「ぬ」「ず」から「ない」に移っていった時期の資料である洒落本を使って、江戸語にお

表 1

	ぬ・ん・ず	ない
郭中奇譚	17	8
遊子方言	33	19
辰巳之園	14	11
道中粹語録	14	35
廊大帳	9	10
傾城買四十八手	22	26
錦之裏	10	13
傾城買二筋道	26	32
品川楊枝	5	27
虚実情の夜桜	9	15
後編遊治郎	7	25
五大刀	7	59
吉原談話	20	20
夜色のかたまり	14	18
合計	207	318

江戸語における打消の助動詞については、小田切良知(一九四三)、中村通夫(一九五九)、坂梨隆三(一九七三)など、多くの指摘がみられる。これらによると、江戸語では打消の助動詞として「ぬ」「ず」と「ない」が並用されていた<sup>注4</sup>。小田切(一九四三)では、明和期の江戸語を資料として「ぬ」と「ない」が江戸語においてどの程度使用されたのかを調査している。その結果、明和期において

ける打消の助動詞「ない」に、接続助詞「ば」がついた形である「ないければ」は、「ねば」「ずは」と意味用法においてどのような違いがあったのかについて検討する。資料には十四作品の洒落本<sup>注5</sup>を使用した。

## 二 江戸語における「ねば」「ずは」「ないければ」

は、上方語的である「ぬ」の勢力が極めて強く、「ない」は下層社会において多く用いられていたかも知れないが、全般としては「ない」の勢力は極めて弱かったとしている。

表1は十四作品の洒落本における打消の助動詞「ない」及び「ぬ」「ず」について調査した結果である<sup>注6</sup>。

表1によると小田切(一九四三)が指摘したように明和期の洒落本である『郭中奇譚』『遊子方言』においては「ぬ」「ず」のほう「ない」よりも多いことが分かる。しかし、寛政・享和期の洒落本である『傾城買四十八手』『五大刀』などでは「ない」のほう「ぬ」「ず」よりも多い。このことから明和期から寛政・享和期に

表 2

	ねば	ずは(ば)	ないければ
郭中奇譚	1(1)	0	2(2)
遊子方言	4(3)	1	0
辰巳之園	1(1)	1	1
道中粹語録	0	1	3(1)
廊大帳	0	0	1(1)
傾城買四十八手	3(3)	1	0
錦之裏	2(2)	2	0
傾城買二筋道	0	2	5(2)
品川楊枝	0	1(1)	3(2)
虚実情の夜桜	0	0	1(1)
後編遊治郎	3(3)	2	3(1)
五大刀	1(1)	2	2(2)
吉原談話	3(3)	1(1)	0
夜色のかたまり	3(3)	0	1
合計	21(20)	14(2)	22(12)

注：数字は語形による用例数。

( )内の数字は当為表現の用例数。

かけて江戸語における打消の助動詞は「ぬ」(「ず」)から「ない」へと勢力が移っていったことがわかる<sup>56</sup>。

表2は、十四作品の洒落本における打消の助動詞「ない」「ぬ」「ず」に接続助詞「は」が続く形である。「ねば」「ずは」「ないければ」<sup>57</sup>について調査した結果である。表2のように十八世紀後半の江戸語において「ないければ」「ねば」「ずは」<sup>58</sup>が並用されていることが確認できた。

表1では、明和期から寛政・享和期にかけて「ない」が多く見られるようになってきているが、表2を見ると、「ないければ」に限っては「ねば」「ずは」よりも多く見られるようになっていない。すなわち、十八世紀後半の江戸語における打消の助動詞は、しだいに「ぬ」(「ず」)よりも「ない」のほうが優勢となるにも拘わらず、「ねば」「ずは」は、いまだ「ないければ」よりも優勢であったことを表している。

### 三 「ねば」「ずは」「ないければ」の条件表現と当為表現

表2から見ると、十八世紀後半の江戸語において「ねば」「ずは」「ないければ」が並用されていたことがわかる。しかし、江戸以前の日本語では「ねば」と「ずは」との間には、確定条件と仮定条件という意味用法の違いがあったように、江戸語においても、「ねば」「ずは」「ないければ」の間にも意味用法の違いがあったと思われる。そこで、洒落本において「ねば」「ずは」「ないければ」がどのよう

### 三・一 本稿における条件表現の分類

「ねば」「ずは」「ないければ」は打消の助動詞による順接条件表現である。順接条件表現については、小林賢次(一九九六)などによって詳細に分類されている。ここでは大まかに、順接条件表現を仮定条件、恒常条件、確定条件に分類する。本稿では、仮定条件、恒常条件、確定条件を次のように分類する。

仮定条件……動作・作用の完了した場合を仮定するもの。現代日本語では、「たら」「なら」を使って表すことができる。

恒常条件……ある事実が成立する際にはいつでも以下の帰結句の事態が成立するという、恒常的・普遍的性格を持つたものとして提示するもの。現代日本語では、「と」を使って表すことができる。

確定条件……条件句が原因・理由を表し、帰結句がその結果を表すもの。現代日本語では、「ので」「から」を使って表すことができる。

仮定条件、恒常条件、確定条件を現代日本語の例で表すとすれば次のようなものとなる。

- 4 a 松井がエラーをしなければ勝つことができた。
- 4 b 松井がエラーをしなかったら勝つことができた。
- 5 a 練習しなければ試合に勝てない。
- 5 b 練習しないと試合に勝てない。
- 6 雨が止まないで試合は中止となった。

例文4 a の場合、「松井がエラーをしたので負けた」という事実があり、そのことについて「松井がエラーをしななければ」ということを仮定している。このため、例文4 a の「なければ」は仮定条件として用いられる。この場合の「なければ」は、例文4 b のように「たら」に置き換えることもできるが、「と」に置き換えることはできない。例文5 a の場合、「練習をするので試合に勝てる」という事実があるわけではなく、「練習をしない」だから「試合に勝つことができない」というように条件句と帰結句との間に恒常的・普遍的な関係を想定して、例文5 a の「なければ」は恒常条件として用いられる。この場合の「なければ」は、例文5 b のように「と」に置き換えることもできる。例文6 の場合は条件句が原因・理由を表しており、その結果が帰結句に現れているので確定条件である。現代日本語では確定条件には「ので」や「から」などを用い、打消の助動詞「ない」の仮定形「なければ」を用いて確定条件を表すことはできない。

本稿では右記の分類に従って、洒落本の「ねば」「ずは」「ないければ」の用例を分類し考察を進めていく<sup>注</sup>。

### 三・二 仮定条件

仮定条件は「ずは」を用いて表現されることが多い。今回の調査では「ずは」の条件表現はすべて仮定条件を表していた(十四例中十二例)。その中でも、仮定の副詞「もし」と共起している「ずは」の例が二例見られた。

7 「アイ左様なら、もしけふ中にうれずは、あしたもつて参り

ましやう」(『錦之裏』(例文3に同じ))

8 「あしかのさん、髪ゆひのお吉さんが、二階へきちやアいなへか、見てきてくんなし。お針部屋もみてきてなんしよ。もしまだ来ざア、下夕の中郎の人をたのんで、呼にやつてくんなし」(『錦之裏』)

例文7は「ものが今日中に売れなかつたら」ということを仮定している場面である。

例文7や例文8のように「もし」と共起している場合のほかにも「ずは」は仮定条件として用いられる。

9 「あの子が氣にいらざア、外の子でもお呼なんし」(『辰巳之

園』)

10 「いんにや、でへぶねむくなつたヨ。ときに、おらアいゝが、

おめへはちつと早くけへらざアわるからうによ」(『傾城買四十八手』)

11 「つまらざアコレくでもおかもとへやんねへな」(『五大刀』)

「ずは」を用いた仮定条件は、例文9のように、明和期の洒落本である『辰巳之園』においても見られ、例文11のように、享和期の洒落本である『五大刀』においても見られる。このように「ずは」は、この時期を通じて仮定条件として用いられていた。

僅かではあるが、「ないければ」にも仮定条件を確認することができた(二十二例中二例)。

12 「おつと氣のみじかへもんだ。こゝからわりださねへけりや

ア、きつい所はあてられねへ」(『傾城買一筋道』)

13 「うそく、そふいわねへけりやア、おけへりなさるめへと」

(『後編遊治郎』)

例文13は、うそを言った発話者が、「うそを言わなかつたらお帰りにはならないだろう」と仮定している場面である。すなわち、例文13の「ないければ」は仮定条件として用いられている。例文12も同様に、条件句と帰結句とが仮定条件で結ばれている。

このように、仮定条件として用いられた「ないければ」は寛政期になって見られるようになる。ただし、洒落本で見られる仮定条件は、「ずは」で表されることが多く、「ないければ」で表すことは僅かしかない。なぜ仮定条件においては「ずは」のほうが優勢であったのであろうか。

江戸以前の日本語では「ねば」は確定条件であり、今回の調査でも、十八世紀後半の江戸語において「ねば」の仮定条件の例は見出せなかった。また、「ないければ」は寛政期から仮定条件が見られるが、まだ仮定条件としての意味用法を十分に持ち得なかつたのである。このため、江戸以前の日本語から仮定条件であった「ずは」が十八世紀後半の江戸語においても仮定条件として存続したのである。このことは、「ずは」が、推量の助動詞と呼応する<sup>注10</sup>ということが多いことから裏付けられる。「ずは」が推量の助動詞と呼応することは、坂梨隆三(一九八二)及び(一九八七)で指摘されている。今回の調査でも、例文7や例文10のように「ずは」には、推量の助動詞と呼応した例が見られる。しかし、打消の助動詞の勢力

が次第に「ない」へと移っていったため、「ないければ」による仮定条件が寛政期から見られるようになったのである。さらに、享和期になると、例文13のように、推量の助動詞と呼応する例が「ないければ」にも見られる。このことにも、「ないければ」による仮定条件が勢力を持ちつつあったことがうかがわれる。

### 三・三 恒常条件

今回の調査では、恒常条件には「ないければ」を用いた例が多いが、「ねば」を用いた例は次の一例だけである。

14 「猪牙船といふものは、あぐらをひツかき、うしろえひぢか

けの、首うなだれの、たばこ、ばくく〜とくらはせねば、船がこぎにくる」(『遊子方言』)

例文14の場合、「猪牙船といふものは」で、恒常的な条件であることを表しており、この場合の条件句と帰結句との間は、恒常的性格で結ばれている。しかし、今回の調査では、「ねば」による確定条件の存在が確認できなかった。「ねば」に確定条件が見られなかつたのは、中世から近世にかけて「已然形」+「ば」による条件表現が確定条件から仮定条件へ変わっていった現象の一つであろう。その一方で、「ねば」が仮定条件ではなく恒常条件として使用されていたのは、仮定条件である「ずは」が江戸語においても存続していたためと思われる。ただ、恒常条件として用いられた「ねば」も明和期にしか見られなかつた。

今回の調査で見られた「ないければ」を用いた恒常条件は、次の

ようなものである(二十二例中八例)。

15 「お江戸の女郎衆ア、なじみにならねへけりやア、おびさアとかねへさうだが」(『道中粹語録』)

16 「おれをしらねへけりやアはじのよふにおもふ世の中だ」(『傾城買二筋道』)

17 「ホンニサ人の異見はいえますが我身の異見は出来ねへとやらで其身になつて見ないければわからないのサ」(『夜色のかたまり』(例文1に同じ))

例えば、例文15の場合、「お江戸の女郎衆」は、「客となじみにならない」という条件であれば、必ず「おびをとかない」という結果になる。つまり、この場合の条件句と帰結句とは恒常的・普遍的関係で結ばれており、例文15における「ないければ」は恒常条件であるとして用いられている。例文16・17の場合も同様に、「ないければ」は恒常条件として用いられている。

恒常条件としての「ないければ」は、『辰巳之園』や『道中粹語録』など明和期から用例が見られる。ただし、『辰巳之園』や『道中粹語録』は、明和期の洒落本のなかでも、表1に見るように「ない」が「ぬ」(「ず」と拮抗あるいは、「ない」が優勢な作品である。

このように、恒常条件として用いられた「ないければ」は、明和期から享和期を通じて見られた。その一方、恒常条件として用いられた「ねば」は明和期には見られない。これは、江戸語における打消の助動詞の勢力が、「ぬ」(「ず」)よりも「ない」のほうへと移っていった時期に一致する。つまり、この時期の江戸語における恒常

条件は、打消の助動詞「ぬ」(「ず」)から「ない」のほうへ勢力が移っていったことに平行して、「ねば」から「ないければ」へと移っていったのである。

### 三・四 確定条件

今回の調査では「ねば」「ずは」「ないければ」を用いた確定条件は見られなかった。打消の助動詞「ぬ」(「ず」)「ない」を用いた確定条件は次のようなものである。

18 「内がやかましくて出られぬから、こつちのほうなぞへは、きた事はねへのサ」(『傾城買四十八手』)

19 「コヲおつにはぐらかすが、おれがいつた事ができねへによつて、いゝわけなしのがまんだな」(『傾城買二筋道』)

20 「ヤモけふは来られんはづなれどよふくくりあわせて参つたゆへちつとも早う帰らんけりやならぬゆへ手まへたちへも無沙汰に致した」(『夜色のかたまり』)

例文18〜20のように、確定条件は接続助詞「から」「ゆへ」によって用いて表される。

### 三・五 当為表現

田中章夫(一九六七)の指摘のように、江戸語には「ねば」「ずは」「ないければ」による当為表現が見られる。今回の調査でも、「ねば」「ずは」「ないければ」による当為表現が見られた(表2参照)。本稿では当為表現を次のように規定する。

当為表現……ある事柄に対して、その実現が要求されることを表

す表現技法。現代日本語では、「〜するべきだ」や「〜なければならぬ」などで表現される。

本稿では「〜ばならぬ・〜ばならない」を中心にすることにす。  
「ねば」の場合は「ねばならぬ」などの当為表現が多く見られた。

21 「だんくおれが伝授で、善二坊のやうな色男を、揚巻の

助六がやうに、つくり直さにやならぬ」(『遊子方言』)

22 「ちよつと浮里さんの所へいかねばならぬ」(『錦之裏』)

(例文2に同じ)

23 「それでも、おふくろさんのおふみを見なんしてから、いっ  
そおふさぎなんすつた留主に、五十匁斗、つかへこんだから、  
其穴を、うめておかにやアならねへわけやいさ」

(『後編遊治郎』)

当為表現としての「ねば」は、明和期から享和期を通じて見られた。また「ねば」の当為表現の場合、「ねばならぬ」のように、前件が「ねば」の場合には後件が「ならぬ」となることが多い。しかし、「ねば」の当為表現においても、享和期には後件が「ならねへ」となっており、打消の助動詞が「ぬ」(「ず」)から「ない」へと移っていった様子がうかがえる。

「ないければ」の場合にも、「ねば」と同じように当為表現が見られた。

24 「旦那に水上ヶおたのみ申さないけりやならぬ」(『郭中奇譚』)

25 「此間人に文をたのんでそれからしられて大きな目にあひやし

た。なんでもこんや中にとゞけねへければなりやせん」(『品川楊枝』)

26 「なんぼおめへが、そふちやにしてかゝつても、こつちやア是非女房にしねへけりやアならねへから、そふおもつてくん

なせへ」(『後編遊治郎』)

「ないければ」の場合も明和期から享和期を通じて、その用例が見られる。また「ないければ」を用いた当為表現の場合も「ねば」の当為表現と同様、明和期には当為表現の後件が「ならぬ」となっているが、享和期には後件が「ならねへ」となっており、ここにも打消の助動詞が「ぬ」(「ず」)から「ない」へと移っていった様子がうかがえる。

なお、今回の調査では、「ねば」「ないければ」による当為表現の後件が「いけない」となる例は見られなかった。

「ず」の場合は「ずはなるまい」という当為表現になる。今回の調査では二例見られた。

27 「なアにけいしがとまつたやうになつていらア。おさめ物に

行かざアなるめへ」(『品川楊枝』)

28 「それに貴さまも、しら髪あたまになつて、天神髻にもいふめへし、杖をついて、中の丁へも出られめへから、始終はどこそへ、かたづかずはなるめへ」(『吉原談語』)

「ず」の場合には当為表現として使用されることが少ない。さ

らに、今回見られた「ずは」の当為表現は寛政期と享和期に見られたものである。なお、例文27・28の場合は、当為表現の後件が「なるまい」になっている。「ずは」の当為表現の場合、後件が「なるまい」で結ばれることは、田中(一九六七)によって指摘されている。

このように十八世紀後半の江戸語における当為表現は「ねば」あるいは「ないければ」を用いて表現されることが多い。このうち、「ねば」と「ないければ」に関しては、ほとんどその用法に違いはなかったものと思われる。例えば、例文23と例文26は『後編遊治郎』からの用例であるが、この二例は共に、「仁三郎」という人物による発話である。しかも、例文23と例文26は共に聞き手が同じなので場面による違いはあまりない。このように同一人物の発話で、かつ、場面における違いがないにも関わらず、「ねば」と「ないければ」の両形が用いられているのである。その一方、「ずは」を用いた当為表現は、「ねば」「ないければ」とは違う用いられ方をしていたと思われる。例えば、例文28は、年をとれば「夜具」をいつもどこかへ片づけておく必要があると述べている場面、つまり、例文28は将来のことについて推測している場面である。「ずは」による当為表現の場合に後件部分が「なるまい」という推量の助動詞「まい」を用いるのはそのためである。このように「ずはなるまい」は推量の場面で用いられ、「ねばならぬ」「ないければならない」とは異なる。

#### 四 「ねば」「ずは」「ないければ」の意味用法

十八世紀後半の江戸語における「ねば」「ずは」「ないければ」は

当為表現あるいは条件表現として使用されていた。「ねば」は、そのほとんどが当為表現として用いられ、当為表現としての「ねば」は明和期から享和期を通じて見られた。また、「ねば」が条件表現として用いられる場合には僅かであるが、恒常条件として用いられていた。しかし、恒常条件としての「ねば」は明和期においてのみ見られただけである。なお、今回の調査では「ねば」には確定条件としての例は見られなかった。「ねば」に対して「ずは」は当為表現として用いられることが少ない。しかも、当為表現として「ずは」は推量の場面で用いられた。しかし、「ずは」は仮定条件として用いられることが多く、明和期から享和期を通じて見られた。また、当為表現及び恒常条件としての「ないければ」はこの時期を通じて見られたが、仮定条件としての「ないければ」は、寛政期から見られる。

つまり、江戸以前の日本語において「ねば」と「ずは」との意味用法が異なったように、十八世紀後半の江戸語においても「ねば」は恒常条件として、「ずは」は仮定条件として、それぞれ意味用法が異なったのである。そして、「ねば」と「ずは」の両方の用法を持つものが「ないければ」である。「ないければ」は、「ねば」から恒常条件を受け継ぎ、「ずは」から仮定条件を受け継いだ。また、「ないければ」は「ねば」と同じように当為表現も見られた。ただ、恒常条件としての「ねば」が明和期にのみ見られるだけで、それ以降の恒常条件は「ないければ」の勢力のほうが大きくなる。その一方、仮定条件に関してはこの時期を通じて「ずは」の勢力が保たれていたため、「ないければ」の仮定条件はあまり見られなかったが、打消の助動詞「ない」の勢力が大きくなっていったので、「ないけれ



「ば」にも仮定条件が僅かに見られるようになったのである。

## 五 おわりに

以上、洒落本を資料として十八世紀後半の江戸語における「ねば」「ずは」「ないければ」について、その意味用法の違いについて検討してきた。十八世紀後半の江戸語における「ねば」「ずは」「ないければ」の意味用法を図に表すと次のようになる。

図

	仮定条件	恒常条件	確定条件	当為表現
ねば	×	△	×	○
ずは	○	×	×	△
ないければ	△	○	×	○

図から、十八世紀後半の江戸語における「ねば」と「ずは」との間には、当為表現を除いて、意味用法が異なっていることが分かる。また、「ないければ」は、主に当為表現である「ねば」と、主に仮定条件である「ずは」の、両方の意味用法を持つものであるということも分かった。

本稿では、恒常条件における「ねば」から「ないければ」へ、仮定条件における「ずは」から「ないければ」へ、という変遷の様子を考察した。しかし、明和期から享和期の間は、まだ「ねば」「ずは」から「ないければ」への変遷の途中である。「ないければ」がどの時期で「ねば」「ずは」の用法を完全に取り込んでいったのかについては今後の課題としたい。

注1 打消の助動詞「ない」の仮定形に接続助詞「ば」が続くとき、条件表現の他にも当為表現が存在する。本稿の調査では条件表現・当為表現に關係なく形態が同じであるものについて調査した。打消の助動詞「ず」の連用形「ず」・已然形「ね」の後に続く接続助詞「ば」の場合も同様である。

注2 「ないければ」の「ない」の部分が長音化して「ねー」になったり、「ければ」の部分が融合現象を起こして「けりや」や「きや」となり、實際の用例としては「ないけりや」「ないきや」「ねへければ」「ねへけりや」「ねへきや」の形が存在する。ここでは長音化や助詞の融合の形態に關係なく、「ないければ」の例として扱うことにする。「ねば」「ずは」の場合もそれぞれ「にや」「ざー」と融合現象を起こすが、「ないければ」と同様、「ねば」「ずは」の例として扱うことにする。

注3 調査した洒落本は以下の作品である。(作品成立順)

- 『郭中奇譚』(明和六(二七六九)年) 洒落本大成
  - 『遊子方言』(明和七(二七七〇)年) 日本古典大系
  - 『辰巳之園』(明和七(二七七〇)年) 日本古典大系
  - 『道中粹語録』(安永八(二七七九)年頃) 日本古典大系
  - 『廊大帳』(天明九(二七八九)年) 洒落本大成
  - 『傾城買四十八手』(寛政二(二七九〇)年) 日本古典大系
  - 『錦之裏』(寛政三(二七九一)年) 日本古典大系
  - 『傾城買二筋道』(寛政十(二七九八)年) 日本古典大系
  - 『品川楊枝』(寛政十(二七九八)年) 洒落本大成
  - 『虚実情の夜桜』(寛政十二(二八〇〇)年) 洒落本大成
  - 『後編遊治郎』(享和二(二八〇二)年) 洒落本大成
  - 『五大刀』(享和二(二八〇二)年) 洒落本大成
  - 『吉原談話』(享和二(二八〇二)年) 洒落本大成
  - 『夜色のかたまり』(天保三(二八三三)年) 洒落本大成
- 本稿では、『郭中奇譚』から『道中粹語録』までを明和期の洒落本、『廊大帳』から『虚実情の夜桜』までを寛政期の洒落本、『後編遊治郎』から『夜色のかたまり』までを享和期の洒落本として区分する。なお、本稿に

における用例中の句読点や濁点については、筆者（奥村）の考えによって変えたところがある。

注4 「ない」「ぬ」「ず」のうち、「ない」が東国語的で、江戸時代には打消の助動詞「ない」が江戸語の特徴の一つであるといわれている。また、打消の助動詞「ない」は打消の助動詞「ぬ」「ず」に比べて文献上に見られるのが遅く、ロドリゲスの『日本大文典』（一六〇四〜一六〇八）において初めてみられる。

注5 表1には、打消の助動詞「ない」が付かない「くません」と、遊女語の特徴である「くせん」は含まれていない。また、『道中粹語録』には「くましない」「くましねへ」が見られるが、これも含まれていない。

注6 『傾城買二筋道』『吉原談話』『夜色のかたまり』の三作品は「ぬ」「ず」「ん」と「ない」の用例数に差があまりない。これは、「ぬ」「ず」を用いる特定の人物による発話が多いため、このことから、寛政・享和期においても、階層によっては、いまだ打消の助動詞に「ぬ」「ず」が用いられていたことが分かる。

注7 表2における『郭中奇譚』の「ないければ」の用例数には「なければ」が一例含まれている。湯沢（一九五四）では「なければ」は「ないければ」と同様であると述べ、「ければ」については接続助詞となっていている。また、「なければ」の例は全体から見れば数が少なく、「ないければ」の言い方が普通であったと指摘している。洒落本を資料とした今回の調査では「なければ」の例が一例しか見られなかったが、坂梨（一九七三）によると、『浮世風呂』『浮世床』には「なければ」の例が見られず、人情本には「なければ」が数例見られる。また、今回の調査で見られた「なければ」は、明和期の洒落本である『郭中奇譚』に存在するもので、『郭中奇譚』以降の洒落本には「なければ」の存在を確認することができなかった。このことから、『郭中奇譚』に見られた「なければ」の用例の出現は時期的に早いように思われる。

注8 「ずば」は古くは「ずは」であったものであるが、松村明（一九五七）、吉川泰雄（一九七一）などによると、江戸語においては「ずは」とも「ずば」とも表記される。

注9 語形の上では当為表現も接続助詞「ば」に続く形であるが、意味の上で条件表現とは異なるので、当為表現で表されるもの以外を条件表現とした。

注10 坂梨（一九八二）では、未来の助動詞としている。なお、推量の助動詞には「まい」などの打消を表す推量の助動詞も含む。

#### 参考文献

- 小田切良知（一九四三）「明和期江戸語について」(一)(二)(三)  
 —「その上方向的傾向の衰退」『国語と国文学』(一〇)八・九・一一
- 金田 弘（一九六九）「打消の助動詞 二 ない」松村明編『古典語現代語助動詞助動詞詳説』学燈社
- 此島正年（一九七三）『国語助動詞の研究』桜楓社
- 小林賢次（一九九一）「条件表現の歴史」辻村敏樹編『講座日本語と日本語教育 日本語の歴史』明治書院
- （一九九六）『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
- 小松寿雄（一九八二）「近代の文法Ⅱ（江戸篇）」『講座国語史』4
- 『文法史』第六章 大修館書店
- （一九八五）『江戸時代の国語 江戸語』東京堂出版
- 坂梨隆三（一九七三）「江戸時代の打消表現について」
- 『岡山大学法文学部学術紀要』三三
- （一九八二）「近代の文法Ⅱ（上方篇）」『講座国語史』4
- 『文法史』第六章 大修館書店
- （一九八七）『江戸時代の国語 上方語』東京堂出版
- 田中章夫（一九六七）「江戸語・東京語における当為表現の変遷」

『国語と国文学四二一四』

(一九六九) 「近代東京語の当為表現」 『佐伯梅友古稀

記念 国語学論集』 表現社

土井忠生訳注 (一九五五) 『日本大文典』 J. ロドリゲス原著 (二六〇

八) 三省堂

中村通夫 (一九五九) 「江戸語における打消の表現について」

『中央大学文学部紀要(文学科七)』

松村 明 (一九五七) 『江戸語東京語の研究』 東京堂

湯沢幸吉郎 (一九五四) 『江戸言葉の研究』 明治書院

吉川泰雄 (一九七一) 「善くば」「為ずば」などの濁音形について」

『金田一博士米寿記念論集』 三省堂 (『論集 日本語研究

一四 近世語』 所収)

吉田金彦 (一九七一) 『現代語助動詞の史的研究』 明治書院